学位論文要旨

19 世紀末イングランドの基礎学校における宗教教育
－公教育を巡る「世俗化」の社会史的再検討－

広島大学大学院人間社会科学研究科
教育科学専攻　教育学プログラム
教育学コース

学生番号　D203703　　氏　名　中村好甫

序章　研究の目的と課題設定

本論文は、19 世紀末イングランドの基礎学校で実施された宗教教育を、教育の当事者たちの視点から分析し、「世俗化」の過程と捉えられてきた近代イングランド公教育に対しての歴史的評価を再検討することを目的としている。

イングランドの 19 世紀は、国民教育制度が整備された公教育の漸進的な普及期として評価され、教育への国家介入は、「世俗化」の進展として位置づけられてきた。特に 1870 年基礎教育法は、初の地方教育行政制度を整備し、宗教教育を規制する条項を盛り込んだことで、脱宗教的な意義が強く評価され、公教育制度の画期として位置づけられてきた。

連動して、公教育における宗教教育や宗教の存在は、長らく否定的に理解されてきた。これは、宗教勢力を、公教育の守旧の遺物、革新の妨害者としてこれまでの先行研究が位置づけてきたためである。教育制度史および教育政策史研究は、結果的に宗教を、公教育制度と敵対する存在として描いてきた。

ただし、以上の研究動向から、イングランド公教育が 19 世紀末に「世俗化」したとするのは早計である。何故なら、宗教組織と関連する任意団体は、公教育制度の発展に貢献してきたからである。1833 年、国家が直接的な公教育への関与を開始した時、補助金供給の供給を担ったのは、イングランド国教会が組織する国民協会、非国教徒諸派が組織する内外学校協会という教育振興任意団体であった。1870 年に基礎教育法が制定された後も、宗教教育が公教育から完全に排除されたことはない。19 世紀末イングランドには、「公的」な基礎学校が二種類存在した。一つは、地方教育行政機関の学務委員会が管理した「学務委員会立学校」であり、もう一つは、任意団体組織が管理してきた「任意団体立学校」である。任意団体立学校と学務委員会立学校の大多数は、1870 年後も宗教教育を行い、国民教育に大きく関与していた。

更に、イングランド教育史研究の一方には、宗教勢力や任意団体の役割と存在を肯定的に評価してきた諸研究が存在する。こうした研究は、教育社会史的研究において、主にイングランド諸地域の事例を詳細に検討するミクロな視点による分析を行うことで、任意団体ならびに宗教の再評価をしてきた。

つまり、先行研究のイングランド公教育制度の成立・発展理解については、「世俗化」を議論するにあたり宗教教育の評価を巡り、矛盾し乖離した言説と理解が併存している。この問題は、公教育に関する研究を牽引したのが、教育制度史および政策史研究であったことで、国家や教会という権力の対立構造に主軸を置く議論が進行したために生じたと考えられる。しかし、社会史的アプローチを採用する先行研究も、各地域の教育に関わる出来事や活動を発見した一方で、どう人々はそれを受け止めたのかという、「宗教教育の受容」に大きな関心を払わなかった。そのため、宗教の存在が社会にどう影響したのか不明となり、評価を二分してきたのである。問題脱却のためには、支配的言説を取り払い、これまでの多様な宗教教育をもう一度見直す必要がある。

そこで本論文は、宗教教育の当事者たちに注目し、彼らが宗教教育をどのように捉え、認識し、

解釈したのかを紐解く。それにより、宗教教育の受容についての課題に取り組み、宗教と世俗の関係性を相対化する中で、その結果に基づいた宗教教育の新たな理解を提示する。これにより、宗教教育が当時の社会でどのようにみなされたのか、その諸相を描く。つまり、「近代化を達成するにつれて、宗教は衰退をしていく」という「大きな物語」に公教育の展開をあてはめた先行研究に対して、本研究は、宗教教育がどのように認識されていたのかを、人々の様々な事例から、「小さな物語」として抽出し、新たな歴史像を描くことを目指す。公教育における宗教教育の姿を個別具体的に浮かび上がらせ、当時の公教育制度における宗教と教育の関係、教育に対する教会と国家の役割や「世俗化」理解について新たな視座を提示する。

対象は、イングランド国教会の教育振興任意団体である国民協会と彼らが管理した国教会系基礎学校、そこでの教育の当事者たちである。本研究は、このような国教会系基礎学校に関わる当事者たちを中心にして「小さな物語」を描く。国民協会は 19 世紀前半から国内に学校供給を行ってきたイングランド公教育の一翼であり、1870 年以降も、管理する学校数および通学する生徒数は、国内の学校全体のおよそ半数を占めていた。国教会の教義を学ぶことを、当事者たちがどのようにみなしていたのか、国教会系基礎学校に注目することで改めて明らかにできるだろう。

当事者たちの「小さな物語」を描くにあたり、本論文では第一に、先行研究で衰退と捉えられる宗教教育の動向を明らかにし、当時の宗教教育の捉え直しを図る。つまり、先行研究における宗教教育に対する評価の乖離を埋めるため、「世俗化」したとされる 19 世紀末において、宗教教育がどのような思惑の下に展開され、内容や目的、取り組みが具体的にどのように構想されたのか明らかにする。第二に、宗教教育の当事者たちがどのように宗教教育を捉えていたのか分析する。ここでは、当事者である「担い手」と「受け手」両者の視点から、彼らに映る宗教教育の諸相を明らかにする。教育の「担い手」たちには、教師はもちろんのこと、国教会聖職者も含まれる。聖職者はこれまで、公教育において、評価の分かれる存在であった。彼らが基礎学校に直接的に関わるのはなぜなのか。彼らの教育は公教育を妨害するものであったのか。この点を明らかにするため、本研究は聖職者を教育の「担い手」として捉えることで、宗教教育を軸とした聖職者－教師関係の新たな側面を提示する。さらに注目するのは、これまで見落とされてきた教育の「受け手」、つまり生徒たちにとっての宗教教育の意味である。宗教教育の受容を巡り、教育を受けた人々の視点から、宗教教育が公教育に果たした役割について明らかにする。

これらを通して、宗教教育の役割を再評価すると共に、公教育における宗教の役割を改めて捉え直すことで公教育が「世俗化」したと理解される 19 世紀末イングランドの基礎学校の新たな姿を描き出す。このことの意義は、多様な信仰のあり方が認められつつある 19 世紀末のイングランド公教育において、宗教が教育を受けた人々にどのような影響を与えたのかという点から、宗教教育と国民教育の新たな関係性理解を提示することにある。

第一章　国民協会の宗教教育認識

第一章では、教育の「担い手」による宗教教育認識と実践の検討に先立って、これまで等閑視されてきた国民協会の対学務委員会および宗教教育戦略を検討した。具体的には、国民協会と学務委員会制度について整理し、1870 年代に、国民協会の自己認識と対学務委員会認識がどのように構築されたのかその過程と要因を明らかにした。

1870 年基礎教育法は、国の補助金を受ける基礎学校において、宗派の教義や儀式を禁じるクーパー・テンプル条項や、親が子どもを宗教教育から退席させることを認める良心条項を規定した法律であった。特に、同法により発足した学務委員会、および彼らの下、設置される学務委員会立学校の登場は国民教育に大きな衝撃を与えた。学務委員会は宗教教育を非宗派的に行うことを原則とし、様々な教育的・財政的な権限が与えられたために、国民協会の学校管理と運営の脅威となった。

1870 年代の国民協会の年次報告書を確認すると、彼らは学務委員会制度を批判し、自身の宗教教育に対する危機意識を持っていた。イングランド国内の民衆教育を牽引してきた国民協会にとって、基礎教育法の制定、学務委員会制度の発足は、権限、機能、財政等様々な面で、大きな障害となった。その中で自己の正当性の材料として用いられたのが宗教教育であり、国民協会は、宗教教育を新たな公教育制度を批判する論点とした。

結果的に、学務委員会制度が廃止されるまでの約 30 年、国民協会は学校数で、学務委員会を下回ることはなく、基礎教育の一翼を担い続けた。国民協会は 70 年代末、民衆が宗教教育を必要としていることを確信し、1880 年代からの国民協会の公教育戦略の中で、「宗教教育が公教育において不可欠である」とする姿勢を強固にしていった。

第二章　国教会聖職者の宗教教育認識：教区視学官による教区査察制度に注目して

第二章では、国教会聖職者に注目し、彼らの学校における宗教教育の評価と、聖職者自身の教師についての認識を明らかにした。本章が注目したのは、教区視学官の任に就く国教会聖職者である。彼らは、国民協会により国教会系基礎学校に派遣され、宗教教育の査察・試験を実施した。彼らによる査察報告は、国民協会の宗教教育認識の根拠となった。

報告された査察結果を確認すると、基礎学校での宗教教育が 20 年間で向上していることが読み取れる。基礎学校での宗教教育評価は、高、中、低の三段階評価で報告されており、年代を経るにつれて高評価の学校割合が増加し、中・低評価の学校割合は低下する傾向にある。19 世紀末には全体の約四分の三の学校で、高評価の判断が下された。

教区視学官は、基礎学校において宗教教育が維持・向上し、宗教教育が必要とされていることを報告し、国民協会が主張する宗教教育の重要性を裏付ける根拠を提供した。同時に、教師の努力や協力的な態度を高く評価しており、教師を宗教教育の改善に熱心な、協力者として描き、宗教教育の重要な担い手として描いていた。

一方で、教区視学官による教区査察ついては、他の教育の「担い手」たちからの証言から課題

が明らかとなった。彼らは、教区視学官による査察の課題を自らの宗教教育観から述べた。しかしながら、彼らの意見は教区視学官の査察が、国教会系基礎学校での宗教教育に大きな影響与えていたことを示している。宗教教育について、より意義のある宗教教育を実行・評価するにはどうすればよいかという点が同時期には議論の焦点となったと思われる。

第三章　基礎学校教師の宗教教育認識

第三章では、教師が宗教教育をどのように認識していたのかについて、彼らによる証言を中心に、基礎学校における宗教教育の事例と彼らの宗教教育観を検討した。本章では、教師と聖職者の関係を分析する上で、教師から見た聖職者像や、宗教教育を行う目的・意義を明らかにした。

19 世紀、国教会系基礎学校の教師にとって聖職者との関わりは必須であり、聖職者は学校において重要な役割を担っていた。教師の各証言を確認すると、聖職者が学校の授業を直接行っていないのは、都市部近郊の学校のみで、農村地域や小規模の学校では聖職者が授業を行っていた。

また教師の証言は、宗教教育の内容と、彼ら自身の宗教教育観を示していた。彼らは、宗教の授業を毎朝、1 時間程度実施しており、自らの宗教教育に使命感を見出していた。ただし、宗教教育が国教会の教義や儀礼を教えることに偏重していた訳ではない。職務として宗教教育を行うという立場の教師もいれば、宗派間で矛盾する教義を教えない教師もいた。教師たちは、基礎教育法の各条項を理解した上で、自身の価値観や思想の下、柔軟に宗教教育を行うべきと考えていた。

国教会系基礎学校で働く教師の宗教教育についての考え方は様々であるものの、宗教を教えることを通して生徒に道徳的人格を形成させ、彼らの教育に責任を持つことが教師の役割であると考えていた。そのために彼らは、聖職者と協力し宗教教育を行っていた。

教師に多様な考え方があったことを踏まえると、聖職者との「協力関係」は一筋縄ではいかないものであっただろう。しかしながら、両者が交渉を決裂せずに、学校において協力をしたのは生徒の教育という共通の目的とお互いへの信頼があったためだと思われる。

第四章　国民協会による宗教教育の目的と内容：国民協会の教育出版物に着目して

第四章では、国民協会と「担い手」の宗教教育認識が、どのような宗教教育の理想の下で構築されたのか、宗教教育の目的と内容を検討した。そこで、国民協会が、何のために宗教教育を行うべきと考え、生徒に何を教え、教師に何を求めたのか、彼らが出版した「日曜、平日学校教師の為の宗教知識手引書」シリーズ五冊をもとに検討した。

同シリーズが教師に説く教育目的は、「子どもたちを敬虔な崇拝者として教会の一員となるように訓練すること」であり、宗教教育では、宗教的知識よりも信仰心や道徳等の宗教的情操の会得が重視された。五冊の手引書は二通りの教育を構想している。一つ目は、聖書が記す体系的な歴史を生徒に関心を持たせ理解させることであり、その過程で重視されたのは、子どもの興味に基づいた教育の工夫であった。二つ目は、教理問答と祈祷書の暗記による繰り返しにより、宗教的

心情を体得させることであった。こちらでは、機械的な知識の学習ではなく、教会の教えの反復によって宗教的情操を養わせるという宗教教育のあり方を教師に理解してもらうことが目指されていた。

第五章　基礎教育における非宗派主義の検討

第五章では、世俗的な道徳教育の検討を通じて、教育の世俗化を推進した人々がどのような教育の論理と内容を構築していたのかを明らかにした。それにより、これまで先行研究が進歩と衰退の対比で捉えられてきた世俗的な道徳教育と宗教教育の関係について、相互発展的な関係であったことを指摘した。

国民協会が宗教教育のあり方を模索した一方、バーミンガムでは世俗的な道徳教育のあり方が模索された。同地では、世俗的な道徳教育が公教育制度の中で実践され、イングランド全体の基礎教育に影響を与えた。

世俗科目としての道徳教育が、どのような道徳教育の論理や内容を構想したのか分析するにあたり、同地で使用された教師用手引書『道徳科目の授業実例』を検討した。『授業実例』では、道徳的徳目が 40 テーマ設定され、究極的な教育の目的を「子どもの性格の形成」として設定しており、徳目の教授を通じて、子どもを高潔な性格を備えた人間にすることを理想とした。

また、基礎教育の世俗化を推進する人々は、国家が要求する国民が備えるべき道徳的徳目を子どもたちに効率的に、それも宗教に頼らずに獲得させることを模索した。実際、『授業実例』の授業は宗教的要素を意図的に排除していた。つまり世俗的な道徳教育は、体系化を図る上で、宗教教育からの脱却や対立を自身の有益性の論理に組み込んでおり、宗教教育の存在を強く意識し続けていた。

第六章　人々の宗教教育の経験

第六章では、教育の「受け手」に注目することで、民衆と宗教教育についての理解を捉え直し、人々が宗教教育を受けたことを、どのように認識し、記憶しているのかという宗教教育の新たな位置づけを試みた。具体的には、19-20 世紀転換期、基礎学校に通学した生徒と彼らの親による基礎教育についての証言と回想の分析を行った。

親たちの証言は、当時のロンドンにおける任意団体立学校と、学務委員会立学校についての印象、および学校で子どもに宗教教育を受けさせることについての考え方を示していた。証言は、親たちが労働者階級の誰を代表しているのかで見解が異なり、それは基礎学校での宗教教育に求めるものに影響を与えていた。

国教会系基礎学校に通学した人々の回想は、彼らが語る当時の様々な宗教教育の様子とそれに対する認識のあり方を示していた。分析では、彼らが学校や生活の中で受けてきた宗教教育をどのように捉えたのか整理するため、「生徒からみた聖職者」、「生徒の受けた宗教教育」、「宗教教育

の知識や教えをどう受け止めたのか」という三点に注目した。その結果、複数の生徒から宗教教育や学校での教育が、結果的に彼らの宗教観に影響を与えた事例を見つけることができた。

本章は、これまで先行研究が描いてこなかった宗教教育を経験した人々の、教育と信仰についての認識・価値観・態度の一端を明らかにした。彼らの「物語」は、基礎学校での教育が人々の信仰とどう関係するのかを示しており、宗教や信仰の実践についての様々な日常的感覚や態度を表していた。

終章　研究の成果と今後の課題

本論文は、以下の三点を成果として挙げる。

一つ目は、教育の「担い手」たちの宗教教育認識と教育内容、彼らの間に生じた様々な関係性を明らかにしたことである。聖職者と教師の言説は、従来指摘されてきたような「敵対的な対立関係」に必ずしも置かれていたわけではない。一方、宗教教育のある場面では、認識や価値観の相違から「担い手」たちが衝突している様子も確認した。しかし、両者は宗教教育を行うことには肯定しており、どのようにすれば、よい宗教教育を提供できるのかを巡り試行錯誤した。つまり、教育の「担い手」の聖職者と教師は、常に「敵対的な対立関係」にあったのではない。彼らは宗教教育について、生徒の人格形成に必要だとする利害の一致から協力と協議を繰り返した。

二つ目の成果は、宗教教育と「世俗化」を目指す道徳教育にどのような違いがあるのかを明らかにしたことである。これにより、「宗教か世俗か」という両極の理論を比較し、両者の関係と影響を明らかにした。19 世紀末、双方の教育動向は、お互いが共に注目を向け意識していた。国民協会が目指した宗教教育は、いかに信仰を内面化させるかを志向しており、宗教教育の実践例に加えて、何故宗教を学ぶべきなのかという点を強く協調していた。バーミンガム学務委員会が目指したのは、国家の要求する道徳をいかに獲得させるのかという効率性であり、道徳教育の有用性を示すことで宗教教育に対抗しようとした。両者の教育に注目すると、どちらかが新しい、古いという単純な構図で分けることのできない、当時の公教育の動的な様相が示されていた。

三つ目は、基礎学校での宗教教育を複数の視点から捉え直す中で、「受け手」の宗教教育の経験を「小さな物語」として新たに提示したことである。国教会系基礎学校での宗教教育は、敬虔な人物にとって、後の人生を豊かにする契機となった。一方、そうでない人物にとって、宗教教育は日常的で退屈なものに過ぎなかったが、退屈と記憶される宗教教育に何も意味がなかったのかと言えばそうではなかった。多様な宗教教育の記憶からは、彼らが宗教教育の価値を認めた多様な理由を導き出した。信仰から完全に切り離された価値観が、19 世紀末の公教育制度の変化を境に普及したとする従来の公教育の世俗化理解とは異なる状況があった。

これらの成果から導き出せる、イングランドの公教育における「世俗化」とは何か、また近代公教育における宗教教育とはどのような存在なのか。これまで、先行研究で議論されてきたイングランド公教育の「世俗化」は、宗教教育の衰退という理解から導き出されてきた。しかし、宗

教教育の重要性は、教育の担い手によって強く意識され、熱心に実施された。だからこそ、宗教教育とそれに対抗する新たな教育は、両者ともその論理と教育方法を研鑽・発展させた。宗教教育に価値を見出す親や生徒もおり、宗教教育の衰退という言説では捉えることのできない、社会や人生を構成する重要な要素としての宗教教育が存在していた。

宗教や信仰は、国家や教会組織の思惑、教会や学校といった場所、あるいは聖職者や教師の認識とは異なる次元で理解され、受容された。分析の対象には、非国教徒の家庭に育ち、国教会系基礎学校で宗教教育を受けた人々もいる。彼らの親にとって、宗教教育を受けさせることは、望ましくないことであったのかもしれない。しかし、当人にとって宗教教育は世俗科目と同様、日常的な学習の一つとして受け止められていた様子を複数確認することができた。このような姿は、これまで宗教教育を「是」か「非」かで、議論してきた先行研究が見落としてきた人々の宗教教育の受容の有様であった。

宗教教育、あるいは信仰に対する人々の認識には、宗教教育を受容する姿勢についても幾千もの階調が存在している。そうならば、学校という空間を軸にして教育が「世俗化」することを測ることは不可能なことを認めざるを得ない。

本研究が改めて指摘するのは、宗教教育の一般性である。つまり、宗教教育は当時のイングランド社会において、これまで想定されてきた程、特殊なものではないということである。宗教教育は、公教育の中で「担い手」によって、特別なものと位置づけられた科目ではある。しかし教育の「受け手」に目を向けた時、こうした特別な科目であるという「担い手」の期待がどこまで伝わっていたのかは判然としない。彼らにとって、宗教教育とは、学校生活の日常における一場面に過ぎず、良くも悪くも、他の科目と大差がないものであった。

参考文献

【人名事典】

・Matthew, H. C. G. and Harrison, Brian eds., *Oxford Dictionary of National Biography: in association with the British Academy: from the earliest times to the year 2000*, Oxford, 2004.

【欧文文献】

・Adamson, John William, *English education, 1789-1902*, Cambridge, 1964.

・Arthur, James, 'Christianity and the character education movement 1897-1914', *History of Education*, vol. 48(1), 2019.

・Bartle, George F., 'The Teaching Manuals and Lesson Books of The British and Foreign School Society', *History of Education Society Bulletin*, vol. 46, 1990.

・Brown, Callum G., *The Death of Christian Britain*, London, 2001.

・CLARK, J. C. D., 'Secularization and Modernization: The Failure of a 'Grand Narrative" *The Historical Journal*, vol. 55(1), 2012.

・Cruickshank, Marjorie, *Church and state in English education: 1870 to the present day*, London, 1963.

・Dew, Barbara, ‘The clergy and the village school: the role of the clergyman in Church of England schools in Oxfordshire villages, 1860-1902’, History of Education Society Bulletin, vol. 49, 1992.
・Dew, Barbara, ‘A local inspectorate and advisory service?: the work of the diocesan inspector and the organising master in Church of England elementary schools in north Oxfordshire, 1850-1901’, *History of Education Society Bulletin*, vol. 52, 1993.
・Edmonds, E. L., *The School Inspector*, London, 1962.
・Graham, Malcolm, *Oxfordshire at School*, Stroud, 1996.
・Green, Andy, *Education and State Formation: the Rise of Educational Systems in England, France and the USA*, Basingstoke, 1990.
・Green, Joyce, ‘The Anglican Clergy and the Village School: Variations in Initiative and Enthusiasm in Shropshire Schools during the Nineteenth Century’, *History of Education Society Bulletin*, vol. 53, 1994.
・Horn, Pamela, *Education in Rural England 1800-1914*, London, 1978.
・Jacob, W. M., *The Clerical Profession: In the Long Eighteenth Century 1680-1840*, New York, 2007,
・Jacob, W. M., *Religious Vitality in Victorian London*, Oxford, 2021.
・Louden, M. R. Lois, ‘The conscience clause in religious education and collective worship: conscientious objection or curriculum choice?’, *British Journal of Religious Education*, vol. 26(3), 2004.
・Martin, Mary Clare, ‘Church, school and locality: Revisiting the historiography of "state" and "religious" educational infrastructures in England and Wales, 1780-1870’, *Paedagogica Historica*, vol. 49(1), 2013.
・Murphy, James, *Church, State and School Britain, 1800-1970*, London, 1971.
・Murray, Patrick, ‘The Riddle of Goldsmith's Ancestry’, *An Irish Quarterly Review*, vol. 63(250), Summer, 1974.
・Morris, Jeremy, ‘Secularization and Religious Experience: Arguments in the Historiography of Modern British Religion’, *The Historical Journal*, vol. 55(1), 2012.
・Nash, David S., ‘Believing in Secularisation-Stories of Decline, Potential, and Resurgence’ *Journal of Religious History*, vol. 41(4), 2017.
・Nettleship, Richard Lewis, ed., *Works of Thomas Hill Green*, vol. III, London, 1888〔グリーン, トーマス・ヒル著、松井一麿、浅野博夫、宮腰英一、大桃敏行訳『イギリス教育制度論』お茶の水書房、1983 年〕
・Northcote, Vivien Hornby, The use of Christian imagery by the National Society of the Church of England in Religious Education materials from 1884 until the early twentieth century, PhD. thesis of University of Warwick, 2004.
・Northcote, Vivien Hornby, *The Use of Italian Renaissance Art in Victorian Religious Education: How the National Society Shaped Our Modern Idea of Christ*, New York, 2010.
・Phillips, Trevor, ‘HM Inspectorate of Schools and the National Union of Elementary Teachers: a study of their relations, 1870-82’, *Journal of Educational Administration and History*, vol. 26(1), 1994.
・Olney, Richard John, *Lincolnshire politics*, 1832-1885, London, 1973.
・Rectenwald, Michael, *Nineteenth-century British secularism: science, religion and literature*, Hampshire, 2016.
・Richards, N. J., ‘Religious Controversy and the School Boards 1870-1902’, *British Journal of Educational Studies*, vol. 18(2), 1970.
・Roberts, Robert, *The Classic Slum Salford Life in the First Quarter of the Century*, Manchester, 1971.

・Robson, Geoff, 'The churches, the Bible and the child: Sir Joshua Fitch and religious education in the English elementary school, 1860-1902', *History of Education Society Bulletin*, vol. 69, 2002.
・Rose, Jonathan, *The Intellectual Life of the British Working Classes*, New Haven, 2001.
・Seaborne, Malcolm and Ischam, Gyles, 'A Victorian Schoolmaster: John James Greaves, Part Two', *Northamptonshire Past & Present*, vol. 4(2), 1967-68.
・Smith, John, T., *A Victorian Class Conflict? Schoolteaching and the Parson, Priest and Minister, 1837-1902*, Brighton, 2009.
・Sutherland, Gillian, *Policy-Making in Elementary Education 1870-1895*, London, 1973.
・Tholfsen, T. R., 'Moral Education in the Victorian Sunday School', *History of Education Quarterly*, vol.20, 1980
・Wright, Susannah, 'The Struggle for Moral Education in English Elementary Schools 1879-1918', PhD. thesis of Oxford Brookes University, 2006.
・Wright, Susannah, 'Into Unfamiliar Territory? The Moral Instruction Curriculum in English Elementary Schools 1880-1914', *History of Educational Researcher*, 79, 2007.

【邦文文献】

・アークル，V．T．J．著、松村昌家、森道子、新野緑、島津展子訳『イギリスの社会と文化 200 年の歩み』英宝社、2002 年。
・井野瀬久美惠『イギリス文化史』昭和堂、2010 年。
・今井宏編『世界歴史大系 イギリス史 2 近世』山川出版社、1990 年。
・岩下誠「ヴォランタリズムと公教育：近代イングランドにおける民衆教育の構造転換に関する社会史的研究」東京大学博士論文、2011 年。
・岩下誠「イングランド公教育史のなかのヴォランタリズム：研究成果の総括と展望」『日英教育研究フォーラム』15 号、2012 年。
・ヴィンセント，デイヴィド著、川北稔、松浦京子訳『パンと知識と解放と：19 世紀イギリス労働者階級の自叙伝を読む』岩波書店、1991 年。
・ヴィンセント，デイヴィド著、北本正章監訳『マス・リテラシーの時代』新曜社、2011 年。
・ウォードル，D．著、岩本俊郎訳『イギリス民衆教育の展開』共同出版、1979 年。
・大門正克『民衆の教育経験：都市と農村の子ども』青木書店、2000 年。
・大田直子『イギリス教育行政制度成立史：パートナーシップ原理の誕生』東京大学出版会、1992 年。
・オールティック，R．D．著　要田圭治、大嶋浩、田中孝信訳『ヴィクトリア朝の人と思想』音羽書房鶴見書店、1998 年。
・大門正克『民衆の教育経験：都市と農村の子ども』青木書店、2000 年。
・小嶋潤『イギリス教会史』刀水書房、1988 年。
・オルドリッチ，リチャード著、松塚俊三、安原義仁監訳『イギリスの教育：歴史との対話』玉川大学出版部、2001 年。

・オルドリッチ，リチャード著、本多みどり訳『イギリス・ヴィクトリア期の学校と社会：ジョセフ・ペインと教育の新世界』ふくろう出版、2013 年。
・教育史学会編『教育史研究の最前線』日本図書センター、2007 年。
・髙妻紳二郎『イギリス視学官制度に関する研究：第三者による学校評価の伝統と革新』多賀出版、2007 年。
・近藤和彦編『イギリス史研究入門』山川出版社、2010 年。
・サイモン，ブライアン著、成田克矢訳『イギリス教育史I』亜紀書房、1977 年。
・榊原浩晃「『クロス委員会報告書（1886-88）』の体育史的再評価：19 世紀末イギリス初等教育への体育授業導入をめぐって」『福岡教育大学紀要第 5 分冊芸術・保健体育・家政科編』(47)、1998 年。
・柴沼晶子「公教育における宗教教育：その制度的位置づけをめぐって」『敬和学園大学研究紀要』(14)、2005 年。
・柴沼晶子、新井浅浩編著『現代英国の宗教教育と人格教育（PSE）』東信堂、2001 年。
・白石晃一「19 世紀イギリスの初等教育における宗派主義と非宗派主義の問題：1870 年初等教育法の良心条項をてがかりにしてー」『筑波大学教育学系論集』12(2)、1988 年。
・白石晃一「19 世紀前半期イングランドにおける宗教活動と日曜学校の状況：1851 年人口調査によって」『筑波大学教育学系論集』15(2)、1991 年。
・田口仁久『イギリス学校教育史』学芸図書株式会社、1975 年。
・伊達聖伸『ライシテ、道徳、宗教学：もうひとつの一九世紀フランス宗教史』勁草書房、2010 年。
・伊達聖伸編『ヨーロッパの世俗と宗教』勁草書房、2020 年。
・鶴見良次「「新約聖書が完璧に読めること」18 世紀イギリスにおける初等リーディング教育の達成目標」『成城文藝』(207)、2009 年。
・鶴見良次「イギリス慈善学校のリテラリー・カリキュラム：ジェイムズ・トールボットの教師用手引書『クリスチャン教師』(1707)」『成城大学社会イノベーション研究』8(2)、2013 年。
・テイラー，チャールズ著、千葉眞監訳、木部尚志、山岡龍一、遠藤知子訳『世俗の時代（上下巻）』名古屋大学出版、2020 年。
・寺崎弘昭『イギリス学校体罰史：「イーストボーンの悲劇」とロック的構図』東京大学出版会、2001 年。
・中野智世、前田更子、渡邊千秋、尾崎修治編著近代ヨーロッパとキリスト教：カトリシズムの社会史」勁草書房、2016 年。
・中野智世、前田更子、渡邊千秋、尾崎修治編著『カトリシズムと信仰世界：信仰の近代ヨーロッパ史』勁草書房、2023 年。
・成田克矢『イギリス教育政策史研究』御茶の水書房、1966 年。
・長谷川貴彦編『現代歴史学の展望』岩波書店、2016 年。
・長谷川貴彦編『エゴ・ドキュメントの歴史学』岩波書店、2020 年。
・ハンフリーズ，スティーヴン著、山田潤、ビリングズリー，P.、呉宏明監訳『大英帝国の子どもたち：聞き取りによる非行と抵抗の社会史』柘植書房、1990 年。
・ハンフリーズ，ジェーン著、原伸子（ほか）訳『イギリス産業革命期の子どもと労働：労働者の自伝から』法政大学

出版局、2022 年。
・藤原聖子『ポスト多文化主義が描く宗教 : イギリス〈共同体の結束〉政策の功罪』岩波書店、2017 年。
・舟川一彦『十九世紀オックスフォード』信山社、2000 年。
・松塚俊三『歴史の中の教師 : 近代イギリスの国家と民衆文化』山川出版社、2001 年。
・松塚俊三「イギリス労働者階級の自伝と独学の文化」『日英教育フォーラム』24 号、2020 年。
・松塚俊三、安原義仁編『叢書・比較教育社会史　国家・共同体・教師の戦略 : 教師の比較社会史』昭和堂、2006 年。
・三好信浩『イギリス公教育の歴史的構造』亜紀書房、1968 年。
・ムアマン，J. R. H. 著、八代崇、中村茂、佐藤哲典訳『イギリス教会史』聖公会出版、1991 年。
・村岡健二「近代イギリス民衆教育史の再検討」『教育学年報 10 教育学の最前線』世織書房、2004 年。
・森洋子「ホガースの"描かれた道徳" : 当世風七つの罪源について」『美学』34(4)、1984 年。
・森川泉『イギリス学校教育制度の展開と構造 : 1870-1902』広島修道大学総合研究所、1983 年。
・安原義仁『イギリス大学史 : 中世から現代まで』昭和堂、2021 年。
・山中弘「世俗化論とイギリス宗教史」『哲学・思想論集』(27)、2001 年。
・吉井紀子「シャーロット・メアリ・ヤング　児童文学と宗教教育のはざまで」ニュー・ファンタジーの会『イギリス女流児童文学作家の系譜 2　ひなぎくの首飾り』透土社、1992 年。
・ロースン，ジョン、シルバー，ハロルド著、北斗・研究サークル訳『イギリス教育社会史』学文社、2007 年。